

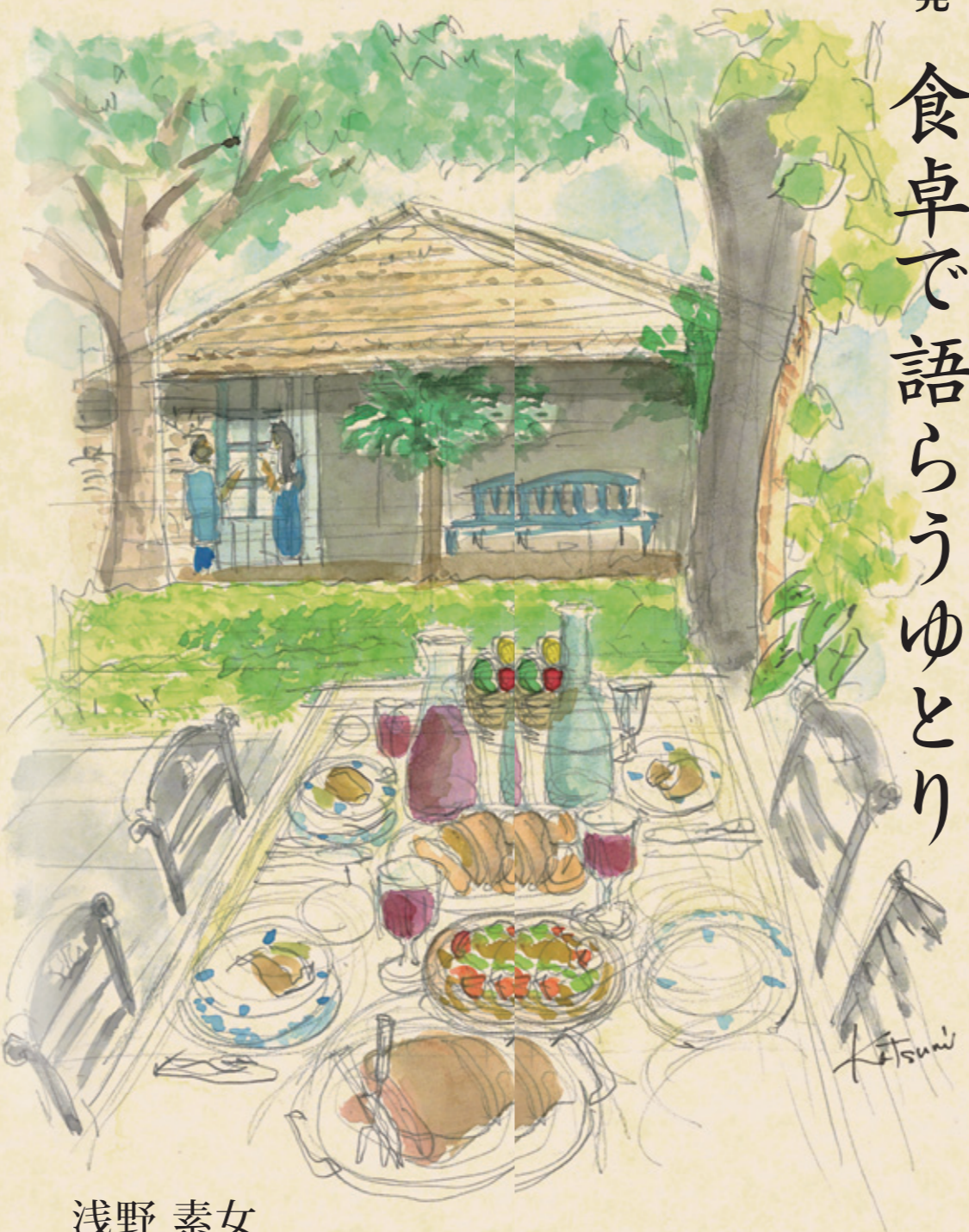
カ月たっぷりあるフランスの夏のヴァカンスは、家族でふだんとはひと味違った体験をする絶好の機会である。もちろん、親の方は2週間くらいの休みを取るのがせいぜいだ。それでも、日本に比べたらずいぶん優雅なものがある。

何も贅沢なレジャーに出かけるわけではない。一部にはそういう人たちもいるが、キャンプをしたり、田舎の実家に滞在したり、山歩きをしたり、それほどお金はかけずに長期滞在を楽しむのがフランス流。母親も働いている家庭がほとんどだから、ふだんの生活は忙しない。その分、休みには自然と親しみ、場所と生活のリズムを変えて、家族の時間を取り戻すのである。

そんな中で、一番の要は食事の時間だ。

2012mail
From FRANCE
フランス発

食卓で語らうゆとり



浅野 素女

みなでいっしょに用意して、おしゃべりしながらゆっくり食事をする。祖父母も加われば、大切な世代間交流の場ともなる。

「ほら、肘をつかないで」

「両手はテーブルの上に出しときなさい！」

なんて、口うるさいおばあちゃんの声が聞こえてきそうである（こちらでは食事中、両手を膝の上に乗せない。というより、テーブルの下に入れるのはお行儀が悪いとされる）。

食事は、単に空腹を満たす場ではなくて、会話や作法を通して社会性を身につける場でもある。久しぶりに会う親戚や友人が加わることもある。アペリティフ（食前酒）のおつまみを勧めるのは子どもたちの役割だ。おじいちゃんがワインを

選ぶ。お父さんは肉を切り分ける。客への接し方やテーブルマナー、そんなことも子どもたちは自然と身につけてゆく。決して窮屈なものではなく、わいわいやりながら、「当たり前のこと」として身にしみ込んでゆく。ワインが回る食事の終わりころには、議論好きのおとなたちもリラックスして笑い話まで飛び出し、おとなも子どもも笑いころげながらデザートを平らげる。

日本では、いくらでもおいしいものが手に入るが、こうした身内と他人を交えての食事の場というのは意外に少ない気がする。食の喜びを分かち合うだけでなく、そこにマナーを尊ぶ姿勢があり、おとなたちがちゃんとそれを示してあげることは、未来のおとなを育てる貴重な教育の現場だともいえる。テーブルの隅で

おとなたちの対話や議論の仕方を観察しながら、子どもたちは学んでゆく。テーブルに座っているのに飽きたら、チーズの皿を取りに行くおばさんの手助けをしてもいい。夏休みのようなゆったりした時間の流れの中でこそ可能な家族の時間だ。

食事が終わりに近づくと、コーヒータンや食後酒まで待つのが退屈で、子どもたちはむずむずし出す。おばあちゃんの「じゃ、席を立ててもいいわよ」の声がかかると、いっせいに庭へ飛び出してゆく…。

学生だった私がフランスに初めてやって来てからすでに30年になる。この国が私に教えてくれたことで一番大きなことは、みなで食卓を囲む時間をとることの大切さだ。あまりに単純な、と思われれるだろうか。グルメだとか、豪華な食事と

かはまったく関係ない。シンプルな食事でも、アントレ、メイン、サラダ、チーズ、デザートと、順を追って（ということとは、ある程度の時間をかけて）ひとコース終わる。そこに会話のスパイスが利いてこそ、「食事の時間」は完成する。

我が家の息子が思春期真っ最中、とても会話するなんて状態でなかった時でさえ、「食事の時間をとる」という姿勢だけに変えなかった。だから食卓が針のむしろであった時期もある。親の役目は、このひとときを守ることにあると信じて辛抱強く続けていたら、いつの間にか息子も成長し、向こうからいろいろ話してくれるようになった。

私自身、若い時はフランス人義父母との長い食事の時間を苦痛に感じたこともある。いまは繰り返されたあの時間が私

を育ててくれたと感謝している。家族が一堂に会し、食と会話を分かち合うというただそれだけのことの積み重ねが、どんなに人生を彩り、深みを与えてくれることか。食を大切にするというのは、人を大切にすると同義語である。適度な距離を保ちながら、ある作法に則って心をこめてふるまうという、日本の茶道にも通じるフランスのふつうの食卓こそ、未来へ今日をつなぐ大切な時空間に思える。

浅野 素女（あきのもとめ）

ジャーナリスト、エッセイスト。フランス・パリ在住。1960年千葉県市川市生まれ。上智大学外国語学部フランス語学科卒業。専門分野は家族問題、末期医療。主な著書は『フランス家族事情』岩波書店、『パリ二十区の素顔』踊りませんか？（集英社）、『フランス父親事情』築地書館など。